

41 山ぢやと申しまする(3) / あ一皆迄云でない うたがふ所もな

い きやつハ蚊ノ精じや 太 / 夫れハどうした事で御座る シ /

江州守山ハ蚊所じや がうを経た蚊ハ人程もあると聞いた 蚊の

分として人間ニ交り血をすハうとするハ扱て / 不適な奴じやな

あ 太 / 何れ横着者で御座る シテ / 扱て今のハ身共が勝か負けか

太 / アまり御勝とも見えませぬ シ / 蚊ニ負くると云ふハ口お

しい事しや 何んとしたものであらうぞ いや 蚊帳をつつて其

内外で取ろうか 太 / 夫でハ手合がなりますまい シ / 夫てバ蚊

やりをたいて其蔭で取らうか 太 / それでハきやつがけむたがつ

て得そばへもよりますまい シ / いや思ひ出した事がある 最一

番取らうと云へ 太 / 畏て御座る 太 / 最一番取うと仰せらるゝ

真 あれへ出させられい 蚊 / 心得ました シ / 太郎冠者行司をせ

田 い 太 / 畏て御座る オ一テー 主 / イヤ / / /

米 (1) 波形本《今参》「似合敷物」 (2) 波形本《今参》「くわをいわふ」

(以下、次回に続く)

るわいやい 太 いづれも御ちようほうで御座ります シテ馬が  
ある二由てふせをこしも入りようずれ 馬がない二由てゑのころ  
をがなとらへてふせおこし 太 もし聞きますわいのく シ  
ふせをこし一調法な者じやなア 太 左様ニ御座り升 シテきや  
つ二何んぞ得たる芸が有か聞いて来い 太 畏て御座る あーの  
ふく 蚊 ハア 太 そなた二何んぞ外ニ得た芸が有るか  
を、せらる、 蚊 私ハ角力を得てとると云ふて下され 太 心  
得た 太 はあ角力を得てとると申します シ あのかやつが  
や 太 左様ニ御座ります シテ扱てくそれがしに生れおふ  
たやつじや 身共が角力をすけバきやつ迄が角力を好く 角力を  
見やう程ニあれへ出て取れと云へ 太 畏て御座る あーのふ  
く 蚊 ハア 太 角力を見ようと仰せらる、あれへ出て取  
らしませ 蚊 角力ハ取りませうが相手を相出しなされハと云ふ  
て下され 太 心得ました ハア 角力ハ取りませうが相手を出  
しなされハと申します シテ 忝人出て取れと云へ 太 忝人  
ハ勝負が知れませぬ シ いか様忝人てハ勝負が知れまい 相手  
ニハ誰かよかろうな されバ誰れがよう御座りませう シ  
風呂を焚く道金な何んとあろうぞ 太 あれハ年寄りました二由  
て角力ハ得取りますまい シ 年寄ツた二由て角力ハ得とるまい  
誰れかれくウよりそち取らぬか 太 私ハつい角力を取た事  
が御座りませぬ シ 取つた事かなくバ知るまい ハア 角力が  
見たし相手ハなし よしく身共が取らう 太 こりや御無用ニ  
なされたらバよう御座らう シ イヤくくるしうない 汝あれ

へいて云ふは 角力ノ者あまた持いたれ共今日ハ方々へさしつか  
わして内ニハ忝人も居ぬ 手合を見よう為めニ身共が取る程ニ取  
るうかと云ふて聞いて来い 太 畏て御座る ア、のふく 蚊  
ハア 太 角力のものあまた御持ちなされたれ共 皆方々へさし  
つかわして内ニハ忝人も居ぬ 御手合を見よ為めニ頼た御方が  
取らうと仰せらる、が取らしますか 蚊 相手ニきらいハ御座ら  
ぬ どなたなりとも取らうと云うて下され 太 心得た 相手ニ  
きらいハ御座らぬどなたなりとも取らうと申します シ きや  
つか角力のたけもおふ方知れた 身共ニ勝つて誰れが扶持をする  
者じや 又負くれバ猶の事 去り乍ら云いか、つた事じや二由て  
取らずバなるまい 身拵へをしてこれへ出よと云へ 太 畏て御  
座る 身拵へをしてあれへ御出さしませ 蚊 心得ました シ ヤ  
イ太郎次郎ちとてつどうて呉れい 太 御無用ニなされたがよう  
御座りませう シテ イヤく苦しうない 身共が勝テ見せう  
用意かヨクバこれへ出よと云へ 太 畏て御座る 用意かヨクバ  
あれへ出さしませ 蚊 心得ました シ 太郎冠者そち行司をせ  
い 太 畏て御座る ヲ、テ 二人 イヤーくく シテ 太郎  
冠者く 太 何んとなされましたく シ そう云ふハ誰じや  
太 太郎冠者で御座ります シ 何んじや太郎冠者じや 太  
中々 シ アーひどい目ニ合せおつた 太 何んとなされました  
シ 扱てく合点ノゆかぬ事じや やつと手合をすると身共ノ  
鼻ノ先がぶうと云ふかと思つたれば ししくとして目かくらく  
として気が遠ふなつた きやつが国ハどこもとじや 太 江州守

所二早速同心なされて此様な嬉しい事ハ御座らぬ 蚊／袖ふる合も多少の縁とやら申すが此様な事でかな御座らう 太／してそなたになんぞ芸ハないか 蚊／是れも芸の内御座るふか 太／何んで御座る 蚊／弓・まり・包丁・碁・双六・馬のふせをこしやツと参つたを存して居ります 太／扱々そなたハ万能ノ人しや此由し頼だ御方へ申げたならばさぞ御嬉ごきびなさるゝで御座らう 蚊／此上ハそなたをよう御宿のと頼みまする程二万事よいよう二引き廻して下され 太／其段なそつともきづかいますすな 蚊／シテ程ハ遠ふ御座るか 太／イヤ何角ト云フ内ニ是レで御座る そなたのわせた通りを申上ふ程ニそれニ暫く待たしませ 蚊／心得ました

真

田 太／頼だ御方御座りまするか御座るか シ／イヤ太郎冠者の声シヤがもどつたか 太／御座りまするか御座るか シ／もどつたか 太／ハ一只今帰りました シ／やれ／＼早かつた シテ新座のものをかゝへて来たか 太／まんまとかゝへて参りました シ／それハどれニ居るぞ 太／御門ニ待たせて置きました シ／あゝそれ大名ジヤと云をうものを 太／イヤ御大名じやと申しました シ／それハでかした 扱々初めある事ハ後迄あると云ふ

ちとかを云ふ 程に汝あまた二答へい 太／畏て御座る シ／やい／＼ 居るかやい 太／ハア シ／あるか 太／ハ一 シ／イタカ 太／御前ニ シ／其ノしよぎぎを持て 太／畏て御座る シ／しやうぎ／＼ 太／ハア御しやうぎ シ／何と今ノを聞かうか 太／御大音で御座るニ由て定めて承りまじやう シテ／扱て汝あ

れいつて云はうハ 頼だ御方只今広間へ出させられた あれへ出て目見得へしやうづ おめがまいつたらバ早速御けんぞうであらう 又御目が参らずバ五日十日逗留ノ事もあらう なぞと云ふて汝が分として深かゝらせい 太／畏て御座る あーのう／＼ それニ御座るか 蚊／是れニ居ります 太／今の御声は御聞きやつたか 蚊／御大名と見へて大きい御声で御座りました 太／是辺りでの御大名じや 扱て頼だ人只今広間へ出させられた あれへ出て目見得をせられうぞ 御目が参つたならば早速御けんぞうであらうが 又御目が参らずハ五日十日逗留ノ事もあらう程ニそふ心得さしませ 蚊／其段はそつとも苦しふ御座らぬ 太／そふあらバあれへ出さしませ 蚊／心得ました シ／ヤイ／＼太郎冠者 太／ハア シ／さむらいの只居られうより いづれも広間へ出て矢の根を磨かれいと云へ 太／ハア シ／又此中関東ヨリ引上せた五百疋の馬の湯洗をさせい 太／ハア シ／あー今日ハよい天気じや 暮ニ及うだれバ各鞆をさせられうず かゝり二水を打てきれいに掃除をせいト云ヒ付けい 太／畏て御座る 新座の者 シ／きやつか 太／左様で御座ります シ／され／＼りこんそふなやつじやなあ 太／左様二ござります シ／シテきやつハ国ハところとじや 太／江州守山じやり申しました シ／きやつ二何んぞ芸があるか聞いて来い 太／是れハ路次で承りましたが弓鞆包丁碁双六馬のふせ起しやつと参つたを存して居るともうしました シ／あのきやつがや 太／中々 シ／扱て／＼まんふなやつじやなあ 太／左様でござります シ／中二もちといらぬ芸があ

## 蚊相撲

大 隠れもない大名 此中方々ノ御参会か打続いた事で御座る  
 夫二付いて某も太ら冠者一人では人が使いたらぬに依て新座のもの  
 のをあまた抱ようと存する 先太ら冠者を呼び出し 申し付やふ  
 と存する ヤイくおるかやい 太 ハー 大 おるかく 太  
 ハア 大 いたか 御前に 大 汝呼び出す別義でない 此中  
 方々の御参会は打続いた事ではないか 太 御意の通り毎日の事  
 で御座る 大 夫二付いて某も汝一人で八人がつかいたらぬ二由  
 てしんざのものあまた抱ようと思ふが何とあらうぞ 太 是ハ御  
 意なくとも申上ふと存して御座った 一段とよふ御座らう 大  
 さうあらばいか程抱よふぞ 太 さればいか程がよう御座る 大  
 大名のせかく置かうより一度二かつと八千人斗りも抱ようか  
 太 是れハ余り夥しい事で御座る それでハ置き所か御座りませ  
 ぬ 大 置所こそあれ あの広い野山にばらくとはないて置ケ  
 太 あの仰せられまするか 人が野山二居て立つものでハご  
 ざりませぬ とてもの事二もそつと御へらしなさせませう 大  
 さうあらばもそつとへらして五百置かう 太 へりもへりました  
 が夫れでまだかんにんが続きますまい 大 何んじやかんにん  
 太 中々 大 かにんく エーかにんと云ふははみもの  
 事か 太 左様で御座る 大 それこそ沢山に水を飲まして置ケ  
 太 また仰せられまするか 人が水ばかり飲で生きて居ら  
 る、ものでは御座りませぬ 逆てもの事にもそつと御へらしなさ  
 れませう 大 さうあらばくわツとへらして二人置ふ 太 あの

二人な 大 そち共二人と云ふ事じや 太 それハ一段とよふ  
 御座りませう 大 そうあらば汝ハ大儀なから今から海辺へいて  
 一人も一人からと見すかいて随分利口そうなやつを抱へて来い  
 畏て御座る 大 急いでいてやがてもどれ 太 ハー エー  
 ハー エー ハー 太らのふく嬉しやく 先づ急  
 て参らふ シカく 誠ニ今迄ハ棒一人にて苦勞を致いたニ  
 しんざのものを御抱へなされたらバ 時々ハ休足を聞いたそうと存  
 する 此様な嬉しい事ハ御座らぬ イヤ 何かと云ふ内ニ海辺し  
 や 是れニしはらく休うて にやはしいもの(一)も通らバ言葉を  
 掛けうと存する 蚊 是れハ江州守山ニ住む蚊ノ精で御座る 此  
 度都へ参り人間と交り人ノ血をすはうと存する 誠ニ人程かしこ  
 いものハ御座らぬ 夏ニなれハ蚊帳ヲ釣り 又蚊やり火を拵へ要  
 害をして蚊をふせぐニ由て 何共気の毒ニ御座る 太 あれハ一  
 段のものが参る 言葉をかけうと存する ア、のうくのうそこ  
 な人 蚊 ハ こちの事で御座るか 太 いかニもそなたの事じ  
 や そなたハとれからとれへ行かします 蚊 身共ハ江州のもの  
 で御座るが奉公が望みで都へ登る者で御座る 太 それハ幸しや  
 身共が抱ふ 蚊 あのそなたがや 太 ふしん尤もしや 身共  
 が抱ゆるでハない 某の頼だ人ハお大名しや 是れハ申して出そ  
 ふと云ふ事しや 蚊 それハ望む所で御座る 成程参りませう  
 太 さうあらバ今からでも御行きやろうか 蚊 何時からなりと  
 も参りませう 太 さうあらばいざ御ざれ 蚊 何がされ先づ御  
 ざれ 太 参らうか 蚊 御座れく 太 扱々フト言葉をかけた

ば薬師のうしろ堂に孤<sup>ま</sup>だれがかけて有 其内へ」(14) 波形本《仏師》は代物に関する内容を欠く (15) (これ以降の注の「波形本」は《六地藏》について) 波形本「いなか者をまんまとだまいてござれども某生まれてこのかた楊枝一本けつた事がござらぬ 乍去代物がほしさに先六地藏を請合てござる」(16) 波形本「徒者<sup>イタツラ</sup>が有」(17) 波形本「やい〜 兩人の者 談合するが有早ふこい」(18) 小アト／なに事じや〜 ニアト／なんぞよい仕合な事でもできたか ト楽やヨリ出ル

(19) 波形本「されハ田舎者が六地藏をあつらへたいと云たによつて某が仏師に成て六地藏を請合た」(20) 波形本は六地藏の形態を欠き「されハ者ハ聞おかふ事じや 仏師に知ル人が有て六地藏の事を聞はつていたによつて夫をかいつまんで云たれハ 某を誠の仏師しやとおもふてまんまと六地藏をあつらへたがなんと出かいたでハないか」(21) 波形本は取り分に関する内容を欠き「夫も身共がくふうした」(22) 波形本「シ／扱々此間ハうちつ、いて仕合がわるいが そちたちはなんと有ぞ ニアト／きのふよい者が来て面白笑しう仕合が出来た所へついで出来て是も取にがいた 小アト／夫ハ残念な事をした シテ／云迄ハないが代物を取たらバ手ばたふちり〜 になれよ ニアト／其段ハぬかる事でハない シテ／いや何かと云内に因幡薬師じや」(23) 波形本は身ごしらえが難航しない (24) 波形本「アト出テイナハ薬師へ行事はモ仏師ノ通 三タイ見テ仏師ヨヒ出ス等同し 手ヲアテル事や 跡ノ一タイハトコニアルト聞」(25) 波形本「アト／のふ仏師殿 同しくハこなたをあれへ同道いたし六体一所におかミたふござるがなりますまいか シテ／安イ事では有れどもさいぜんの三体ハ上京の弟子に作らせ 又只今の三体ハ下京

の弟子が作った 夫故二所におきました 其上いかせまふおし合てござれハ其願人にはちがたります」(26) 波形本「アト／是ハいかな事地藏がうこくハ やい田舎者じやとおもふてよふたましおつた やるまいそ〜 両方へ三人行テ三度目アタリニ菅人ハこしやと云ヒトリハコチシヤト云ウロタエアトニ行アタリ サマ〜ウロツク事第一ナリ」

#### 〔No. 57-12 蚊相撲〕

14行、罫線無。役名、合点、本文ともすべて墨筆。型付は記されない。『波形本』の《蚊相撲》では、冒頭「名乗文撲ト同し人ヲカ、ユル事此類同し 太郎カ、エニ出る事同し」と記し、蚊の精の登場のセリフを記した後、相撲の場面までは「文相撲の通也」として同趣曲の《文相撲》を参考にする形で略記する(かつ《文相撲》では「今参と同じ」として略記)。牧野本ではこれらを略さず、『波形本』の《文相撲》や《今参》と同文を記す。ところが、結末部の蚊と大名が相撲を取る場面では、逆に牧野本は本曲の肝ともいえる、太郎冠者が扇で蚊を扇ぐ場面を記さない。セリフが不連続になっているわけでもなく、この形で上演された可能性もある。なお、安海熊野神社には他に、「古市乙蔵」の奥書を持つ「No. 20-1」があり、これらには扇で蚊を扇ぐ場面があり、それより前の内容は牧野本と同文である。

か 田 イヤ今度ハ何とやら氣二入りませぬ 直して被下 シテ  
 成程心得ました 直しておませふ 田 そふあらば鐘樓堂をも一  
 度見て参りませふ シ ア、是 其様ニ見るニハ及じますま  
 い 田 イヤ念の為で御座る シ ソウアラバ又静かニ御行きや  
 れ 田 心得ました シ 又鐘樓堂 〳 〵、是レ 〳 〵  
 大混亂スル 田 エイ仏師殿 シ エイ田舎人拝ませ 田 心得  
 ました 是リヤ氣二入らぬ 直して貰ふ 仏師殿 〳 〵 ヤア  
 〳 〵 何んと氣二入りしましたかの 田 アレテハ氣二入りませぬ  
 直して被下 シ 成程心得ました ヤアどれへお行きやる 田  
 最一度あちらを見て参りませう シ ア、もうよしニさせられ  
 い 田 イヤ 念の為で御座る シ そふあらば又静かニ御行き  
 やれヤ シ 又後堂へ 〳 〵 色々アリ 田 エイ仏師殿 シ  
 エ、田舎人 サア拝ませませ 田 アアコリヤサン 〳 〵 ジャ 仏  
 師殿 〳 〵 ヤア 〳 〵 今度ハサン 〳 〵 で御座る 直して  
 被下 シ 幾度なりとも直してやらふ 田 モ一度あちらを見直  
 して参ふ シ ア、もふよしニさせられい 田 イヤ 〳 〵 念の  
 為めで御座る 今度ハ早く行きますぞや シ 心得た 又鐘樓  
 堂へ 〳 〵 扱て 〳 〵 合点の行かぬ事じや 其上何やらチラ 〳 〵  
 する エイ仏師殿 シ エ、イ田舎人 サア拝ませませ 田 ヤ  
 ア是リヤサン 〳 〵 体じや 仏師殿 〳 〵 ヤア 〳 〵 尚  
 氣二入りませぬ シ 直してやらう 田 今度ハ直リヤ行キます  
 るぞや シ 心得た 〳 〵 又後堂へ 〳 〵 ワキ座へ行く三人ト田舎  
 人ト大小前ニテ衝突シテコケル 三人ニゲル 田 あのこ、な盗

人共め シ ア 〳 〵 モ早免して呉れい 二人 〳 〵 ちやつトこい 〳 〵  
 笑い入 田 よふ身共をだましおつた やるまいぞ 〳 〵 免  
 して呉い 〳 〵 オイコミ 〳 〵

田舎者 半上下 縞着付二下ク、リ

シテ 狂言袴 十徳 角頭巾 後折

アト三人 羽おり ムギトウ取合ヒ

小道具 鉾、シヤク杖、数珠、衣、玉、乙面ジ、コウシ頭巾

(1) 波形本《仏師》「在所」 (2) 波形本ここから注(4)の箇所  
 まで略述「一在所の老若寄あつまつて今生後生の為に六地藏堂を建立  
 いたいてござるがいま本尊がござらぬ 此度都へ登り六地藏を守り  
 ましてまいらうと存ルト仏師ノ通ニシカ 〳 〵 ニテ都にツキ仏カヲシテ出るも仏師ノ通ナ  
 リ」 (3) 波形本《仏師》「又某の在所など、ハちがふて家作りなど  
 も中よささふに軒とのきむねとむねとをひつしりとツキ合てタテなら  
 べたハ」入る (4) 波形本《仏師》「宝ノ笠榎ナト同ヤウニ廻ル」入  
 る (5) 波形本《仏師》「あつらへまする」 (6) 波形本「扱々夫  
 八大願でおりやる 先ぞなたハ六地藏の難有事をしつておいやるか」  
 (7) 波形本「ト六地藏ノ事ヲ云テヲタケ アスノ今時分ノ方 万事仏師の通ナリ イツレ  
 モ同 〳 〵」以下注(15)の箇所までを欠く (8) 波形本《仏師》「五丈」。  
 愛知県立大本、『狂言集成』も五丈とする (9) 波形本《仏師》「五丈」  
 (10) 波形本《仏師》「夫ハ久敷事でござる 在所にもまちなかてい  
 ませうによつて早ふ作て下され」 (11) 波形本《仏師》は「三年三月  
 九十日」を先に、「明日の今時分」を後に記す (12) 波形本《仏師》「在  
 所へいそぎますれハせう事もござらぬ」 (13) 波形本《仏師》「いな

47 鉾を持つたが一体<sup>(20)</sup> 三 フム シ しゃく杖を持つたが一体

衣ヲ持タカ一体 手ヲ合さるか一体 珠数を持つたが一体 宝珠を持つたが一体 都合六体作る事じや 一 シテ六地藏ハ何人する

シ 身共か思うニハそち達を六地藏としようと思か何とあるう

二 一段とよからうが六地藏ニハ三人ならでハないぞや 三

仲間のものを呼て来う シ 先づ待て 三 何んじや待てとは シ

其様ニ仲間をふやせば 跡で配分が少なくなる<sup>(21)</sup> 身共か思

ニハそち達三人を因幡薬師の後堂ニ立せ 跡三体ハト云ふたれば

鐘楼堂ニあると口じよう法を以てタバカリ代物をハ取れハヨイ

理 二由てよい間を見すましますてすかそうと思うが何んとあらうぞ

真 三人 是ハ一段と能からう<sup>(22)</sup> シ おい 約束の時分じや 身

ごしらへをしよう程ニこうよろしませ 三人 心得た 四人共大小前ニ

田 クツロク 物者

米 シ 身ごしらへがよくバあれへ出させられい 三人 心得た シ

おぬしハ是れをこうしてこれをこう持ツ事じや 二三 共同し様ニスル

色々直しスル内三人体ラクズス

シテ ア、是レ 其様な事があるものか 是れをこうして ア

これ 〳 おぬしハ物覚へが悪るい 必ず 〳 田舎者ニさとられ

ぬ様にさしませ ア、是レ 〳 是レハ如何な事<sup>(23)</sup>

ナド、色々三人ヲ直シ居ル内田舎者来テ呼ヒカケ過テ驚ク 田舎者(狂言名乗座ニテ)(24)

よう 〳 約束ノ時分テ御座る 取りニ参らうと存ずる 是レヲこ

ふ左エ廻て因幡薬師の後堂じやとおしやつが出来て居ればよふ御

座るが イヤ仏師か居る エイ仏師殿 シテ エイ田舎人 田 何

んと出来ましたか シテ 中々見事ニ出来ました サア 〳 見サ

せらい 田 夫ハ 忝 〳 御座る ア、出来させられたり 〳

先拜もふ 扱々 〳 見事ニ出来ました 其ノマ、生て御座る様な

ヤア 是りや六地藏が三体ならでハナイ 仏師殿 〳 シテ

何んと気ニ入りましたか 田 成程気ニ入りましたが六地藏が三

体ならでハない 是れハ先づ何んとした事て御座る<sup>(25)</sup> シ 不審

尤じや出来上たれば殊の外インゾウが大キクなつたニ由て狭い処

でキユウクツソウニおぼしめせバ願人ニ罰があたりうと思ふて跡

三体ハ鐘楼堂ニ作て置た 往て拝まします 田 夫れハ尤もそふ

な事て御座る そふあらば鐘楼堂へ参て拝ましよう シ 夫レ

が能ふ御座る ア、コレ 〳 カマヘテ静カニ行きやれや 田

心得ました シテ 小聲 鐘楼堂へ 〳 立 鐘楼堂 〳 シテ 是レ

かこう 〳 〳 ア、是レ 〳 おぬしハ是レヲ持ツ事じや 是

レハ如何事 田 扱て仏師と申す者ハ良い細工をするものじや

田 エイ仏師殿 シ エイ田舎人 サア 〳 拝まします 田 扱て

〳 是も見事ニよふ出来た事じや シ 何んと気ニ入りましたか

田 中々 〳 是も見事て御座るがあちらを最一度見直して参

りましよう シテ ア、是レ 〳 其様ニ見るニハ及ヒマスマイ

田 イヤ 念の為で御座る シテ そふあらば又静かニ行かしま

せ 田 心得ました シテ 後堂へ 〳 立 何後堂 シ 静カニ

〳 シテ 是れをこう 〳 〳 田 エイ仏師殿 シ エ、イ

田舎人 サア拝まします 田 是れハ何やら最前とハ違ふ 直し

てもらおふ 仏師殿 〳 シテ ヤア 〳 何んと気ニ入りました

を救い 又一体ハ手を合せて無ケンノ苦を救ひ 又一体ハ珠数シユスを  
 持てシユラ道ノ苦を救ひ 又一体ハ宝珠を持テ餓鬼道ノ苦を救ふ  
 都合六体作て被下 シ／サテく／なま長い事を能ふ覚へさしま  
 した 成程合点した して御丈ハ何程作らうぞ 田／はい尤何程  
 が能ふ御座らうぞ シ／壹丈八尺<sup>(8)</sup> 斗りハ何んとであらう 田  
 何壹丈八尺<sup>(9)</sup> シ／中々 田／夫れはあまし大キウ御座る  
 モツト小サウ作て被下 シ／少サウトおしやれば一寸八分ツツ  
 田／ナニ一寸八分 シ／中々 田／夫レハあましちいそう御座る  
 シ／それあらば 某が某かせか頃ハ何んとであらうぞ 田／是ハ  
 一段と能ふ御座らう サテイツ頃出来る事で御座る シ／されば  
 三年三月九十日もかゝらうか 田／ア、是ハく／田舎もので御座  
 れば其様に逗留もなりません モツト早う作て被下<sup>(10)</sup> シ／早  
 にとおしやればあすの今時分 田／チト不審申したい事が御座る  
 シ／夫れは如何様な事じや 田／サレバ三年三日九十日モカ、  
 ラムウラムウものをあすの今時分とハ何とした事で御座る シ／不審尤  
 じや 最前も申す通り某ハ安阿弥の流しやニ由て弟子共をあまた  
 持たに由て 御くじ御くじか御くじ御手ハ御手ニ作らせて某かにかわか  
 げんのしすまして 片はしからべたく／と付て廻るニ由てあすの  
 今時分 又三年三月九十日か、ると云ふハ某が一細工て御座る<sup>(11)</sup>  
 田／是ハ尤もそうな事で御座る 成ル可くハそなたの一細工が  
 望みなれ共 其様に逗留モなりませんニ由て是非も及ハぬ<sup>(12)</sup>  
 翌の今時分作て被下 シ／成程心得ました 田／シテ何処へ取  
 リニ参る事で御座る シ／教へたりとも得御行るまいニ由てコレ

ヲコウ左へ廻テ因幡薬師カアル 其ノ後堂へ<sup>(13)</sup> 作シ置ウ程ニ  
 行て御かまします 田／成程心得ました シ／又気入らぬ何かあ  
 らば其辺ニ居ル由テ仏師ト云ふて呼ハせられハ直して御まそうぞ  
 田／夫れハ忝う御座る シテ代物は何程て御座る<sup>(14)</sup> シ／五百  
 疋で御座る 田／何五百疋 シ／中々 田／夫れハ余り高価ニ御座  
 る モツトまけて被下 シ／仏ニ限てまけか御座らぬイヤなら  
 ばおかしませ 田／私モハるく／参た事で御座るニ由て成程求め  
 ましよう 代物た三條の大黒屋で相渡し申すで御座る シ／大黒  
 や存して御座る あれで受取るて御座らう 田／又市へ参りまし  
 たらば御尋て申すて御座らう シ／必ずく／よろしませ まちま  
 するそ 二人／サラバく／シ／ヨウオリヤツタ 田／ハ一  
 田舎者クツログ  
 シテノウく／嬉しやく／マンマト田舎者をたばかつて御座れ共<sup>(15)</sup>  
 某ハ生れ付いてこの方よふじ一本けずつた事モ御座らぬ 又  
 某のせい頃と申すも謀事あつての事で御座る 茲ニ某と同じ様な  
 ものが御座る<sup>(16)</sup> 是れを呼ヒ出し談合せうと存ずる 幕ニ向  
 ヒ ヤイく／チャツトコイく<sup>(17)</sup> 立／何事トヤく／シ／チト  
 談合したい事がある 先ハこう来ておくりやれ 三人／心得た<sup>(18)</sup>  
 シ／先ツ下ニ居か 三人／心得た 扱て談合とハ何事じや シ／  
 別な事でもないが最前田舎者ニ出会うて面白おかしう口じよう法  
 を以てうまくと仏な請負たが何んと手柄をしたでハないか<sup>(19)</sup>  
 三人／夫れハ一段の手柄じや 一／シテ仏ハ何を請負うた シ／  
 六地藏を請負した 一／夫レハ先づどの様なものじや シ／先ツ



『波形本』では前半を類曲《仏師》を参考にする形で略記されているため、この部分は《仏師》との違いを挙げた。

田舎者／是ハ此辺<sup>(1)</sup>の者で御座る<sup>(2)</sup> 某先祖菩提<sup>ホダイ</sup>の爲の持仏堂を建立致いて御座るが未だ御仏が御座らぬ 此度都へ登り仏を求めよふと存ずる 誠二年月の望みニ御座たニ堂ハ首尾よう成就致いて御座る 此上ハ御仏さへあれバ某の願ヒは相叶ふたと云ふものじや 何卒よい仏が求めて帰りたいものじやが イヤ 何角と云ふ内ニ都そふな ハア先ツ賑かな事かな<sup>(3)</sup> ホ 身共ハ忘れて事がある 此仏がイツ方ニあるを存せぬ 遙る／＼在所へ問ひに戻られまいし是ハまづ何んとしたものであらう ハア さすがハ都じや 売買ふものも呼バはつて廻れハ物事と、のふと見へた 身共も此仏の欲しい様子を呼はつて参ろうと存ずる シ、米 申々 そこ元ニ仏師は御座らぬか 仏が求めとふ御ざる 仏師やいなイカノ仏買イス 仏が求めとう御座る ア、コレ／＼仏師を知らせられぬか 仏買ふ／＼<sup>(4)</sup> 一ノ松着乗ノリ シテ／＼是ハ洛中ニ住居する心の直くニない者で御座る あれへ田舎者と見へて何やらハツハと申して参た キヤツニチトたづさハツて見ようト存ずる ハアのふ／＼のふそこな人 田／＼身共か事で御座るか シ／＼イカニモそなたの事じや そなたハ此広い街道を何をハツパト云ふて廻らします 田／＼私ハ田舎者で御座る りようじハ申さぬ まツびら御免なれシイ／＼ シ／＼ア、のふ／＼りようじを御しやるでハない 見れば何やら用ありそな体<sup>テイ</sup>じやニ由て身共ニ似

ようた用ならば聞いてモやろうと云ふ事じや 田／＼其れハ忝ふ御座る 私仏が欲しうてカ様ニ呼バて参ります シテ／＼フム／＼シテそなたハ其仏師屋がいづかたにあるか知ておいやるか 田／＼これハ都の人トモ覚えませぬ 其仏師やを存して居れば其れへ参て求めます<sup>(5)</sup> が存せぬニ由てか様ニ呼て参ります シテ／＼先是れハ身共があやまつた してそなたかしやわ<sup>ツツ</sup>せな人じや 田／＼しやわせと申して見エた通りなもので御座る シ／＼いや／＼其様ニそでつまのついたしやわせでハない 身共ニ御出やつたがしやわせじやと云事じや 田／＼とわどうした事で御座る シ／＼い普請尤じや 身共こそそなたの御尋にやる真仏師じや 田／＼アハツチャコハモノ ツトそれへ御行わしませ シ／＼とは何んした事じや 田／＼テモまむしじやとおしやつたニ由て さ、れてハならぬ こちへよらしますな シ／＼其れハそなたの聞き様が悪い まむしでハない 真仏師と云ふ事じや 田／＼ハテ仏師ならば仏師と云へばよいニ 真仏師とは何とした事で御座る シ／＼昔雲慶短慶阿弥と云ふて仏師が三流あつた 雲慶ト短慶とは跡がたへて阿弥陀の流れ某一人じやニ由て真仏師と申す事で御座る 田／＼これはむりな事では御座る 扱て仏か求めとう御座る 見せて被下 シ／＼仏ニ限て出来合ニハない 何なりとも好まします 作ておまそう 田／＼それハ忝ふ御座る そふあらば 六地藏を作るて被下 シ／＼シテ六地藏の有難いわれを知ておいやるか<sup>(6)</sup> 田／＼如何ニも知て居ります 先一体ハ<sup>(7)</sup> 鉾を持って天道ノ苦を救ひ 又一体ハシヤク杖を持って地獄ノ苦を救ひ 又一体ハ衣を持って畜生道ノ苦

と恥をか、せたかよいト云入 舞／あ、是く 男／なんしや 舞／  
たびく違ふて面目も御座らぬが 又違ふて御座る 男／なんと

舞／八幡の前にと致さふ 男／フン 先ぎんしてみましょふ 舞／  
きんして見させられい 男／いか斗り 舞／ソレ 男／神も嬉しく

おほすらん 舞／ソレく 男／八幡の前に 舞／ハテよい覚の  
男／フムン 面白ふ御座る 舞／出来ましたのふさらは 舞／ヤア

のふく 今の歌のあとヲおしやれ 舞／今の歌のあとニハちと  
見へぬ物が御座る 男／歌のあとに見へぬ物が入ましょふか サ

アく早ふいわせられい 舞／ハテ もふよふ御座るわいのふ  
ト云テ二足ニケル 男／よいとおしやらとも 文字がたりませぬ 舞／

文字がたらずハ物ト致さふ 男／なんと 舞／八幡前にくニと  
致さふ 男／それでハみしかふ御座る 舞／みちかくハなこふ致

さふ 男／なんと 舞／八幡前にーといつ迄も ⑩ 引かふわいの  
ふ 男／おのれ最前より身共ヲうつけにするそふな 此歌のあと

をいわぬ内ハとつちへもやらぬぞ 舞／ア、今思ひ出いた 此歌  
の跡はものしや 男／なんと 舞／ものと 男／なんと 舞／どふ

がめにいたてたり 男／あのやくたいもない とつと、おいきや  
れ 舞／面目も御座らぬ ト云テ頭ヲ下ケ先へ入ル

(1) 波形本「弓を遊ハさば」入る (2) 波形本「仰付られい射て  
お目に懸うとおしやれ 其時舅が扱は舞は殊の外弓が上手しやと思ふ

て 夫なら当り近イ放生川に水鳥が有 是へ同道するて有う 扱放生  
川へイテ水鳥を遊ハせと云て有ふ 其時そなたのおしやる、にハ 何

の多イ内を射たらハまぐれ当りと思召さう 矢壺ヲ好ませられい 射

てお目に懸うとおしやれ 弥上手しやおもふて舅がこのまる、であ  
らふ 其時そなたが射たりとも 中々あたりハせまい シテ／いかな

くそばへも参りますまい アト／定て舅が笑わる、て有ふ シテ／ア、  
笑ひませうとも (3) 波形本「造宮」 (4) 波形本「頭字」 (5)

波形本「まんまと射人」 (6) 波形本「あのやうな利根な人ハ有ま  
い」入る (7) 波形本「何かと云内に放生川でござる 太郎冠者 太

郎／ハ 男／入る 次の「ハア、おるはく」無し (8) 波形本「扱々  
弓が上手と見へた 太郎／ハ 男／夫ならばあの」 (9) 波形本「あの

す、ん行鳥しやの」 (10) 波形本「いつ迄も」無し

〔No.57-11 六地藏〕

10行く12行、罫線無。役名、合点、本文ともすべて墨筆。安海

熊野神社蔵本の中で《六地藏》はこの一本のみである。本曲に関  
しては本文が『波形本』と大きく異なっている。『波形本』と『雲

形本』系、三宅派の『狂言集成』等の諸本のそれぞれに、①騙す  
側がシテとアド二人の計三人か、シテの他にアド三人の計四人か

②地藏を三体ずつ仮置きする因幡堂内の場所を、本堂の後堂の他  
に鐘楼堂と明示するか否か ③田舎者が地藏の頭に手を当てるか

否か ④代金の受け渡しに関するやり取りがあるか否か、などの  
異同が入り組んでいる。牧野本は①シテの他にアド三人の計四人

②鐘楼堂を明示 ③手を当てない ④やり取りあり、となってい  
る。本稿では注として『波形本』と大きく異なる箇所を挙げたが、

ます 男／フムン 弥々智殿ハ上手しやとみへたなア 太／左様  
 そふニ御座り升ル 男／そふあらハあたり近いほうしやう川に水  
 鳥が数多居升ル 是へ同道致たいがお出被成て下されようかとい  
 ふて聞てこい 太／畏て御座る ハ あたり近いほうしやう川に  
 水鳥が数多居升るが 是へ御供いたしたいが お出被成て被下り  
 よふがと申され升ル 男／何方へ成共お供申そふとおしやれ 太  
 畏て御座る ハ 何方へ成り共お供申ふと被仰升 男／そふあ  
 らハこふお通り被成いといへ 太／畏て御座る ハ かふお通り  
 被成ませふ 男／心得た 男／しよたいめんじ御座る 男／不案内  
 二御座る 男／扱テほしやう川へお供申そふと申たれハお出被成  
 ふと有て満足いたいた 男／何方へ成り共お供申ませう 男／そ  
 ふあらハござれ 男／心得ました 男／扱此ほうしやう川と  
 申スハせつしやうきんたんの川で御座れ共 某ハしさい有て苦  
 田 申すハせつしやうきんたんの川で御座れ共 某ハしさい有て苦  
 米 しう御座らぬ 男／ハア 男／ハア、おるは 男／夥敷イ水  
 鳥じやなあ 太／左様で御座り升ル 男／あの内ヲとれ成共遊ハ  
 セト いへ 太／畏て御座ル ハ あの内ヲとれ成共遊ハと被申ま  
 ず 男／ウム、アノ多イ内ヲいたならハまくれあたりしやと被仰  
 ふ 矢壺ヲ好ませられい とれ成共いてお目ニ掛とおしやれ 太  
 心得ました あの多イ内ヲいたならハまぐれあたりしやとあふ  
 せられふ 矢壺を好ませられい いてお目につけふと被仰れます  
 男／フウン されハ弥々婚殿ハ上手しやとみへたなア 太  
 左様で御座ります 男／ア、あの三ツつれて行く中でも す、ふ  
 て行のヲあそはせトいへ 太／畏て御座ル あの三ツつれて行く

中でも す、ふて行のヲ遊サレいと申ます 男／フムウン あの  
 三ツつれて行く中でも す、ふてゆくのをいるのしやの 太  
 左様で御座り升 男／心得た 追付仕ル 男／松ニ立テ居テ教ヘル ヲシ  
 エテ／左ヲ 男／橋掛リヲ見テ弓矢ヲいろくとする 弓矢つかいそふ アトとり直  
 シテヲシヘル 男／婚殿ハ何ヲしておらる、 早ふ被遊トいへ 太  
 畏て御座る サア 早ふ被遊ませう 男／追付仕ル 男／鳥  
 が立升ル 早あそばせトゆへ 太／鳥か立升 早ふ被成ませふ  
 男／扱々世話しい 追付仕ル あの三ツつれて行中でも す、う  
 て行のやの 太／左様で御座り升ル 男／そりやいた 男／ハア、  
 あたらなんだ 笑 太／扱々へたかな 笑 男／ハア、  
 ハア是々 其様ニ笑やんな 石が浮こふだ 男／なんしや  
 石がうかふだ 笑 男／アト 男／一首く 男／ア、是く  
 一首うかふだといふ事ニ御座る 男／智殿は歌がなるそふなわ  
 やい 太／左様で御座り升 男／いかめかしい 男／なんしや い  
 かめかしい 男／二人笑 アト／いかめかしい 男／なんしや い  
 ふて御座る 男／なんと違いました 男／いかめかしいと致さふ 男  
 フムン先ツ五文字がおもしろふ御座る 男／かみげにおりやる  
 男／なんしや かみげにおりやる ト云テ笑ふ 扱々色々な事をいわ  
 る、なア 太／様く 色々な事を被申ます アト／かみも嬉しくおほす  
 らんく 男／アハ、是く 又違ふて御座る 男／なんと違  
 いました 男／かみも嬉しくおほすらんと致そう 男／フムン面  
 白ふ御座る 男／弥八が孫の 男／なんじや弥八が孫の 笑く  
 男／又キ、二行 アト／八幡の前にておりやる あの様ナ奴にはたん

れ 舞 心得ました アト 矢壺ヲ好まれたり共中々当ル事てハ有  
 まい 舞 いかなくそバへも行事てハ御座りますまひ アト 其  
 時一首うかふだとおしやれ 舞 一首うかふだとハなんの事て御  
 座る アト ハテ歌ヲよむ事てて御座ル 舞 ハア、 アト いか  
 斗り神も嬉しくおほすらん 八幡の前に鳥居立チけりとおしやれ  
 舞 それには何ンそ子細が御座るか アト いかにも子細がある  
 此頃八幡二造具(3) 有て鳥居が立た そなたの鳥をい立テた  
 と鳥居ヲ立テたとヲよせ合た心しやが なん面白イ事てはないか  
 舞 ハア面白そふな事て御座る アト 所ふさへおしやれハ 舞  
 殿ハ弓ハ上手なれ共 歌ヲよもふ斗りニわざといはつしたと有テ  
 舅がよろこふて弥々舞ニする事ておりやる 舞 それハ忝のふ  
 存升ル シテ今之歌トやらハ誰が云事て御座る アト ハテ誰が  
 云物しや そなたのおしやる事しや 舞 其なまなかい事ヲなん  
 と私シ一人りして覚ませうそ アト 扱々それハきのどくな事し  
 や そふあらハ歌の頭字(4) をいふたらハ覚へませう共 アト 所ふ  
 何が扱テ頭字さへいふて被下たならハ覚へませう共 アト 所ふ  
 あらハほうしやう川江見物が数多おるで有ふ 某も其見物の中へ  
 見へがくれ二いて歌の頭字ヲ云ておましやうぞ 舞 それハ忝の  
 ふ存まする そふあらハ私シハもふかふ参り升ル アト ヤのふ  
 く 舞 なんて御座る アト 弓をかしてやらふ程ニそれニまた  
 しませ 舞 それハ忝のふ存し升ル アト これく是ヲ持テお行  
 やれ 舞 是てよふ御座りまするか アト 所ふ持ツ物テハない  
 弓をかふ持テ矢をかふもたしませ 舞 なんといてと見へ升るか

アト あつばれのいてと見ゆるぞ 舞 忝のふ御座り升ル そう  
 あらハ追付お出なされて被下ませう アト 押付くくておりやる  
 ふ 兩人 さらハく アト よふおりやつた 舞 ハア引 のふ  
 く嬉しやく 先急テ参う 誠に又物知りハ格別な物て御座る  
 何も知らぬ者をまんまと舞入のなる様ニ(5) して被下た(6)  
 何卒首尾よふ仕をふせて帰りたい物て御座る イヤ何カトイ  
 ふ内ニ是しや もの申案内申 太 イヤ表ニ案内が有ル 案内ト  
 ハたそ 舞 高札之表ニ付て舞が参たとおしやれ 太 心得まし  
 た ハ 高札之表ニお付なされて舞様のお出で御座り升ル 男  
 ナンしや 舞が見へた 太 左様で御座り升ル 男 高札ニハ一  
 げい有ル物ヲト出シましたが げいハ何をなさる、ト云てたづね  
 てこい 太 畏て御座る ハ 高札にハ一げい有物ヲと出しまし  
 た 芸ハ何ヲ被成る、と申され升 舞 芸か 太 左様で御座り  
 升ル 舞 幕方アムキニ足弓ノほこ先ヲアトヘトシテ見セル トヒ 太 フムン 弓を  
 被成升か 舞 おんでもない事 弓をいるとおしやれ 太 心得  
 ました ハ 弓をなさる、と見へまして ほこ先ヲお見せ被成て  
 御座る 男 フムン すれハ舞殿ハ弓が上手じやと見へたナア  
 太 左様で御座り升ル 男 扱てしはん丸物さげはりなとハ な  
 らぬかといふてたつねてこい 太 畏て御座る ハ しはん丸物  
 さげはりなとハなされぬかと申され升 舞 夫は大方こぶしの定  
 た物しや 水鳥なり共かけ鳥成共御好ミ被成 射て御目に掛とお  
 しやれ 太 畏て御座ル ハ 夫は大方こぶしの定た物て御座る  
 水鳥成共かけ鳥成共このませられい いて御目ニかけふと被仰

御座る 是に美人の一人娘ヲ持て御座る 何者ニハよるまい何ン  
 そ一けい有物ヲ簪に取るふと高札と立られて御座る 某ハ何モ芸  
 ハ御座らね共 爰に御目かけらる、御方が御座ル 是へ参り何そ  
 一けい習ふて婚入を致そふと存ル シカ／＼ 誠に加様な事トそ  
 んしたならハとふ二一げいならふておかふ物ヲ 参るさきへ立ヲ  
 迷惑いたす事て御座る 去りながら参りてお願申たならハおしへ  
 て下されぬといふ事ハ御座るまいト存ル イヤ何かと云内ニ是し  
 や 物申御案内申 アト／＼イヤ表に案内が有 案内トハたそ 簪／  
 私して御座り升ル アト／＼エイ誰殿 今日ハきれいな出立テおり  
 やるのふ 簪／＼なんトよふ御座り升ルか アト／＼イヤ是へ来初メて  
 からつい二見ぬ出立ておりやる 簪／＼其筈て御座り升ル 私シハ  
 今日た簪入を致シます アト／＼ヤレ／＼それハ目出たい事しや  
 其様な事ぞならハ何そ用でも有ふ二聞てもやらふ者ヲ 簪／＼それ  
 に付て参りました アト／＼それハいか様ナ事じや 簪／＼当り近イハ  
 幡之里ニ宇徳ナ人が御座る 是に美人の一人娘ヲもたれて御座る  
 何者にハよるまい一げいある者ヲ簪ニ取らふと高札と立られて  
 御座る 私シハ何も芸ハ御座らねとも おまへになんぞ一けい習  
 ふて簪入を致そふと存テ 高札ト引せて御座る 何ぞ一けいおし  
 へて被下たならハ忝のふ存升 アト／＼扱々爰ナ人はうつけた事を  
 いふ人しや 芸といふ物ハ今習ふてつい覚へらる、者でハ御座ら  
 ぬ 簪／＼ハアン つい覚へらる、者でハ御座りませぬか アト／  
 中々 急ニ覚へらる、者でハ御ざらね 簪／＼そふあらハよふ御座  
 る 元之様ニ高札とたて、かへしませうまで アト／＼ア、コレ

／＼ 簪／＼ハア アト／＼一度ひかせた高札なんぞ立てかへさる、者  
 しや 惣ならハ何ンぞ一けいおしへて遣ふが何も下地之ある事ハ  
 おりないか 簪／＼イ、ヤ何も下地の有物ハ御座りませぬ アト／＼ほ  
 うてうハならぬが 簪／＼鉈丁とハなんの事て御座る アト／＼ハア料  
 理する事て御座る 簪／＼イ、ヤ是ハ成りますまい アト／＼鞆はなら  
 ぬか 簪／＼まりナ アト／＼中々 簪／＼まりハ人のけさせらる、ヲ見  
 ましたが 私シハ終にけた事ハ御座りませぬ アト／＼見た斗てハ  
 是もなるまい そふあらハ鉄砲はならぬか 簪／＼鉄砲ナ アト／  
 中々 簪／＼アノ音ヲ聞てさいもきもヲつふれます 是も成ります  
 まい アト／＼扱々はハこまつた物しや そふあらハ弓ハなんとし  
 や 簪／＼弓ハなりませうか アト／＼とハとふした事しや 簪／＼悴之  
 時分ニ浜弓ヲいた事が御座つたが これハ成りましようか アト  
 浜弓ヲいたといふて弓のたりニなる事てハ御座らねとも 去り  
 なから ねから知らぬよふニハ有まい そふあらバ弓ヲおしへて  
 おまそう 簪／＼それハ忝のふ存シ升ル アト／＼先あれへおいきやつ  
 たらハ 高札にハなんぞ一げい有物と出しましたが芸ハ何ヲなさ  
 る、とおふて尋ぬて有ふ 其時弓のほこ先ヲ見せさしませ 簪／  
 心得ました アト／＼扱テ アト／＼しは丸ものさげはりなとハならぬ  
 かといふて尋ルて有るふ それハ大方こぶしの定まつた者しや  
 水鳥成り共かけ鳥成り共 御好みなさされて御目ニかけよふとお  
 しやれ アト／＼心得ました アト／＼扱て迎り近クほふ上川へ同道  
 して水鳥ヲ好むて有ふ あの沢山之中ヲいたらハ まくれあたり  
 じやと仰られふ 矢壺ヲ好ませられい 射てお目ニ掛ふとおしや

う程に納ニさせられい / 左様ニ御座らバ納致しませふ 太盛ヲ主  
ヘ持テ行ク 太郎冠者今之者を出せ / 畏て御座る / 何などハ存  
 しますれ共之ヲ進じまする シテ / 之ハ如何事之ハ何とした物で  
 あらふ ココへモ有ラズ こゝへもはいらす イヤヨイ事を思付  
 / 聳殿ハ何をして御座る / あれに弓をあちこち被成て御座り  
 まする / そうあらバ物影から様子を見せい / 畏て御座る ア  
 レ アレで御座りまする 二公笑 / 常々ちぎ人しや聞たがたれそ  
 なぶておくしたと見へた (5) 難義をさせらる様に舞をしようも  
 う / 一段と能ふ御座りませふ / 目出度舞を舞せられい / 舞  
 とう御座れ共懐中が指こうで舞れませぬ / 舞ハれぬと云ふ事ハ  
 御座るまい 平ニ舞せられい / 夫ならバ舞ませう 目出度かり  
 ける時とかや (6) / 夫ハ余りみしこう御座る程 こんとハ左右  
 へ廻て舞ハせられい / 左右へハさすかみが御座つて舞れませぬ  
 / 廻わぬと云事ハ御座るまい 此所之大法で御座る程ニ舞せら  
 れい / 心得ました / 喜に又喜を重けり (7) ア、あれく  
 / なせにまはらせられぬ / 只今廻りました / イヤ身共ハ見な  
 んだ とかく一人てハかれこれ仰せらる 相舞ニ致そふ (8) (舞  
 之内に) / ヤツトナく (10) / こりやなとす / やつとなく  
 / 之ハ如何事 之りやなんと ヤツトナく (11)  
 (1) 「へ」の誤記 (2) 波形本「なふつて」 (3) 波形本「何な  
 りとも引出物が出たらバ」。「つる」は、「出づる」の意か (4) 波形  
 本「意見」 (5) 波形本「下々末々の者に随分わらうなといへ 太郎  
 かしこまつてござる」入る (6) 波形本「トタツハイシテ左右シテ

留ル」入る (7) 波形本「又初メノ通ニ舞」入る (8) 波形本「男  
 / いわう心は万歳樂 ト立テタツハイサイウシテ扇ヲ取ル 扇取レヌ  
 ユエニ扇ヲ口ニクハエ ヒタリエ取ル 早く一ツマハリ其後両ノ弓の  
 ホコ先ニテ」入る (9) ( ) 原本に有り (10) 波形本「トシウト  
 ヲハネルヤウニスル」入る (11) 波形本「男 / 是太郎冠者くトニゲ  
 ル 其通ニ (11) 男ヲライコム」入る

### 〔No. 57-10 八幡前〕

14行 / 16行、罫線無。役名、割注、合点を含めすべて墨。『波  
 形本』とほぼ同文を記す。安海熊野神社には他に、「大正式年八  
 月十八日 編 藤城良吉」の奥書を持つ「No. 60-2」や、「鳥居  
 寅蔵 持主」の奥書を持つ「No. 114-1」などがあるが、これらも  
 同文である。

男 / 八幡之里ニ住居致ス大宇徳之者て御座る 某シ美人之一人  
 リ娘ヲ以て御座る 何者ニハ依ルまい 一けい有物ヲ聳ニ取ろふ  
 と高札トウたせて御座る 今日た最上吉日て御座るニ依て 聳が  
 わするて御座ろふ 先太郎冠者ヲ呼出し申付ふと存ル ヤイく  
 太郎冠者有か 太 / ハア 男 / イタカ 太 / 御前ニ 男 / 汝シ呼出  
 ス別義でない 今日た吉日しやニ依テ聳かわするて有らふ 見へ  
 たならハ此方へ申セ 太 / 畏て御座る 男 / エイ 太 / ハア  
 聳 / 是ハ此辺りの者て御座る あたり近い八幡之里ニ宇徳十人の

ヤ表二案内かある 案内とハ誰ぞ 〳ハア私て御座りまする 〳ハアー今日はきれいな出立でおりやる 〳なんとよく御座りまするか 〳之れ以<sup>(1)</sup> 来始メてから遂二見ぬ出立ておりやる 〳其ハすで御座りまする 今日聳入を致ます 夫ならバ何そにようた用ても有らうに 聞てもやらふ物を 〳其事二付て参りました 〳夫ハ如何様な事しや 〳聳入之時儀さほうハ事之外六ヶ敷イ者しやと申 此方にハ折々聳入を被成まする二依 よう御存て御被成被下たらバ忝う存まする 〳イヤ此所な者ハ人間かわるい いつ身共其様二聳入をした 〳デモ舅御方へ折々御出二成二依ての事で御座る 〳アレハ折々ノ雪見舞と云ふてゆく事しや 成程聳入之しぎさほふといふ物ハ六ヶ敷物しや それがしも其様ナ事ハそらてはおほへぬ 物之本ニ書付ヲ置た 見てきでおしへておまじよ 夫にまたしませ 〳畏て御座ル 〳是ハいかな事 扱々うつけた事ヲ申て参つた あのよふな物ハさきへいてはしをかくよふニ なつふ<sup>(2)</sup> てつかはさふと存ル のふ〳〳それニ御座るか 〳是二いまする 〳書た物ハちよほふナ物て御座 大昔中昔とうせいよふと三段有ル 何れがよふ御座りましよふぞ 〳されハ何れがよふ御座りましよふ 何れも若イ衆ハとうせいよふ〳と申されまずに依て 其とうせいよふヲおしへなされて被下ましよふ 〳とうせいよふハ中ても一番心安イ そうあらハとうせいよふヲおしへておまそへ 先あれへおいきやつたらハ引出物かつるてあるふ<sup>(3)</sup> 皆懐中する事て御座る 〳ハア懐中さいすれハよふ御座り升ルか 〳懐中さいすれハ舅力悦こふて聳二する事

て御座る 〳それハ忝のふ存升ル 左様御座れハ私ハもふかふ御座り升ル 〳おいきやるか 〳目出度聳入を致てから御礼にまいりませう 〳必ス〳〳出さしませ 二〳〳さらハ〳〳 のふ嬉しや〳 先急イて参ろう 誠に物しりトイふ物ハちよほうな物て御座る なにもしらぬ物かまんまと聳入てくるよふニして下された 此よふナ嬉しい事ハ御座らぬ 何卒しひよふしあふせて帰りたい物しやが イヤ何角トいふ内にはしや 物申案内申 〳イヤ表に案内がある 案内トハ誰ソ 〳そちハ是の太郎冠者か 〳左様て御座り升ル 〳聳かきたとおしやれ 〳畏て御座る ハ 聳様の御出で御座り升ル 〳こふ御通り被成いていへ 〳畏て御座る ハ 〳こふ通り被成ましよふ 〳心得た 〳ハ 聳様ト御座り升ル 〳初対面ニ御座り 〳不案内ニ御座る とふ参ルはつて御座つたニ かれこれおそなわりました 〳太郎冠者御盃ヲたせ 〳畏て御座る 御盃キもちました 〳聳殿はちざせられい 〳先舅殿から始メさせられい 〳そうあらハ私シから始メましよふ 太郎冠者お盃ヲもて 〳畏て御座る 調度参いれ〳〳 〳なふある 〳シテ此盃ヲ聳殿へ進しませう 〳私シがいた、きましよふ 〳太郎冠者持てゆけ 〳畏て御座る 調度参れ〳〳 〳ヲ、ある 〳けつかうな御酒で御座る 〳御氣二入てよるこぼしう御座る 〳只かう茨を逆もきしたやうな酒で御座る 〳最一ツ参れ 〳最一ツたへませう 太郎冠者酒ヲツグ 〳此上ハ内ハで御座る 〳二依て何事もゑんりよ無しに相談さしませ 〳此上ハ万事御ゆけん<sup>(4)</sup> たのみ升 〳何かさて心得ました 〳扱て此盃を上げませ

く／＼やい／＼やいそこなやつ／＼なんしや／＼早牛も淀おそ  
うしも淀と云ふ時ハ あさつても今しぶんにはおいつこうそいや  
い／＼勝たそ／＼／＼させい／＼ほうせい ト牛ヲライカケ(20) シテハ  
入ル

装束 目代 侍烏帽子 素袍 長上下 刀 扇

アト 半上下 ク、リ キヤハン

シテ 袴斗 下ク、リ キヤハン 羽織

（持ち物図あり）

- (1) 波形本「打」入る (2) 波形本「扇ニテヒタイアテ寝ル」  
(3) 波形本「御座る」ナシ (4) 波形本「第一」 (5) 波形本「つ  
つとありあかつて来て」 (6) 波形本「見するぞよ」 (7) 波形本「シ  
テ／＼それハたれが アト／＼身共が」入る (8) 波形本「なされませ  
(9) 波形本「ならぬわい」 (10) 波形本「其通云ナリ」 (11) 波  
形本「うつくしい」 (12) 波形本「お」ナシ (13) 波形本「同シ」  
入る (14) 波形本「取次スル」 (15) 波形本「ヨツテ」 (16) 波  
形本「ござらうが」 (17) 波形本「程」 (18) 波形本「其通云」入  
る (19) 波形本「かしこまつてござる」 (20) 波形本「ライ立テ」

### 〔No. 57-9 懐中髻〕

14行、16行、罫線無。役名、割注を含めすべて墨。合点も墨で  
「へ」様の山がある。

全体に『波形本』に沿っているが、引き写しではない。例えば  
冒頭部について、『波形本』では「／＼舅名乗此類同し 太郎ニ云付同し

髻名乗是又同し 仕付ヲ習に行シカ／＼ともニ替る事なし」の  
ように省略されている。これは、『波形本』では髻入狂言が連続  
して掲載されるため先掲の〈折紙髻〉を参照するよう指示してい  
るのだが、牧野本では省略せずに関係を記している。

反面、牧野本は、髻が引き出物の弓を懐に入れようと苦勞する  
場面の所作や、舞の型（注6）、結末部が追込ミになる旨（注  
11）については記さない。本稿では『波形本』との違いを逐一挙  
げることはしなかったが、特徴的なものを注の形で掲げた。

このほか、装束付を記さず、全体に誤記が散見する点は前回掲  
載〔No. 57-2 先切木〕と共通している。

／＼之ハ此辺ニ住居致す大有徳な者て御座る 今日ハ最上吉日て御  
座るニ依テ髻が見ゆるはずで御座る まず太郎冠者を呼出し此由  
申付ふと存る 太郎冠者あるか／＼ハアー／＼居たか／＼お前に  
／＼汝し呼出ス別儀て無イ 今日ハ最上吉日しやニ依て髻か見ゆる  
ハずしや 見へたらバ此方へ申せ／＼畏て御座る／＼エイ／＼  
ハアー

シテ／＼舅にいとしがらる、花髻て御座る 今日た最上吉日て御座  
るに依テ 髻入を致ふと存る 又髻入之時儀さほうと云ふハ殊之  
外六ヶ敷イ事しやと申ス 此所ニ個様な事をよう存た御方が御座  
る 之へ参り習ふて髻入を致ふと存る 誠に個様な事と知たぞな  
らバとうに習ておけバよく御座たに 参ル先へ立テめいわく致す  
事て御座る イヤ何かと云ふ内ニ之しや 物申 御案内申／＼イ



57 じや、馬口勞しや、身共ハ目代殿しやと思てよいきもをつふ

いた、そちか馬口勞なれば身共ハ牛を商売する者しや、夫がか  
まふ事か、夫ハともあれ、先おのれハづうとあとからきて、<sup>(8)</sup>

なせニ上ニ居る、そこをのけ、イヤ爰な者が、身共こそ早ふ  
来た、のきたくバそちのけ、おのれのかぬと目ニ物を見する

ぞ、<sup>(9)</sup>、そちが目ニ見せたらバ、こハからふわいの、てい  
と云ふか、おんても無い事、おのれにくいやつ、夫ふめ

く、<sup>(10)</sup>ト馬ヲ持テフマズル心ナリ、チャト牛ヲ引ニゲナカラ、エ、出合く、  
やい、之ハ何事じや、トヲサヘテアトノ方カラ行、おまへハとな

理、たて御座る、所之目代しや、先お礼を申上ます、礼ニハ  
及ぬか何じや、其事で御座る、私ハ此辺りニ住馬口勞で御座る

真、当所ハ富貴ニ付て、<sup>(11)</sup>初通リヲ云フ、目代イカニモト云フ、夫故早々より参  
て一の杭ニつないて御座れば、あれニ居るお、ちやく者が私ヨリ

米、おそう参て、上ニつなぎましたニ依テのけと申せば、のくまいと  
申すニ依テ、夫故只今の通りで御座る、すれバそちが早ふ来た

か定か、左様で御座ります、やいやい之ハ何事をあらそう  
ハ、<sup>(12)</sup>ト云ヘバシテモ一通リ云テ同、其事で御座る、<sup>(13)</sup>当所が富貴ニ付テ云フ、のく

まいと申せば馬ニふませふと申ますニ依テ、夫故只今の通りニ  
申ました、すれバそちが早ふ来たが定か、いかにも定で御座

ります、<sup>(14)</sup>一通リヲ云フ、先夫ハともあれ、此目出度市初メニ牛な  
どが出る物でハ御座りませぬ、上つかたハ申すニ及ず、万事馬ニ

お乗りなされて御入なされます、<sup>(15)</sup>又ちご若衆の御里通ひお  
寺通ひと申事も、馬ニ召しての事で御座る、いつのならいにて牛

ニ召して入らせられた事ハ、ついニ無い事で御座る、きつと仰付

られて被下ませふ、之ハ尤じや、もうしく、私の宿ニちいさ  
い駒が御在ります、わこさまへ上ませふ、かぶんハあれ共

うくる事ハならぬはいや、<sup>(16)</sup>其通リヲ云フ、<sup>(17)</sup>之で承りました  
尤上ニハ申二およばず、ちこ若衆が牛ニ召した事ハ御座りませ

ぬか、乍去此牛と申物で春大地をかやいて田を作り、秋之米と申  
物が出来る事で御座る、此ぐごをちやうミいたしてこそ、ちこ若

衆のお里がよいも御座らう、朝夕ぐごをちや<sup>(18)</sup>ミなされずば、い  
かなるちごもおとがいで蠅をおわせられうと存ます、是も尤

じや、もうしく、私之方ニ極てよい、<sup>(19)</sup>まだら牛がこさる  
若様のお、<sup>(20)</sup>なくさみニ上ませふ、<sup>(21)</sup>目代シカく、<sup>(22)</sup>之モ取次ク、<sup>(23)</sup>

之で承ました、其ようなさもしい事ならてハ得申ますまい、其う  
へ馬にはいげんか御座る、<sup>(24)</sup>両方ヘ云フテ二入トモ語有リ、<sup>(25)</sup>両方スマヌニヨリ、<sup>(26)</sup>

之でもらちがあかぬ程ニ、此上ハなんぞ勝負をせい、左様ニ御  
座らバ駒くらへを致ませう、成程よう御座ります、<sup>(27)</sup>馬

を持ちませぬニ依テ牛でハ成りますまい、<sup>(28)</sup>其通リ云、<sup>(29)</sup>夫ならば  
私之勝て御座る、<sup>(30)</sup>其通リ云、<sup>(31)</sup>夫ならばバよう御座る、あのやせ馬位

ハ、<sup>(32)</sup>ハ此牛もあるかぬと申事ハ御座らぬ、夫ならハ之へ出よ  
かけくらべせようと仰られて下され、<sup>(33)</sup>サあ、前後があれ

バわるい、拍子を三ツ打ふ程ニ、三ツ目の拍子でかけ合せよ、  
かしこまりました、<sup>(34)</sup>ト二人共牛ニノツテ、<sup>(35)</sup>さあ、<sup>(36)</sup>ト云テ馬ヲ引廻

シテ舞台ヲ一ベンマワリ、ハイ、トカケサセ橋掛リへ行、はい、<sup>(37)</sup>ト  
モアドノアトヲシタイ一ベンマワリ、<sup>(38)</sup>させい、<sup>(39)</sup>トイフゲドモ行かぬ脇座カラ、<sup>(40)</sup>勝たそ



目／是も尤しや 其通云 女／是て承りました いやう（一）物ヲ申

まする 夫ハ間ニ立た絹や布の事で御座る あいつがせおうたハ  
昆布切程な切てこそさらうずれ 呉服ニナル物ハ得持ますまい

シテ／やいそこな女め 己か其小桶に入夕餅の分て五節句のい

わゐが成物か 女／内ニハいかほとも有わいやい シテ／おれも呉

服が内にハあるわいやい 女／わ男おのれ内ニも有ハせまい シテ

／持夕いてなんとせふ 目／やい／夫ハ水掛論と云物しや 是

てハすまぬ程二なんぞ勝負をして 其勝負によつて 市司を申付

ふ 女／是ハ目代様の御意御座れ共 男ト女ノ勝負に成事ハ御座

りますすまい 目／夫ハそうなれ共 理非リヒの分ワケやうがないに依てし

や 何ぞ勝負カ有そふな物しやが 女／何ぞ有ればよふ御座るが

目／木のほりハならぬか 女／左様の事ハ女の見くるしう御座

ろふ 目／川渡りもなるまい 女／とかく女の事で御座る依て下

に居ての勝負をいたし度御座る 目／夫ならはうでおしすねおし

女／いや申 すねをしと申をついにいたゐた事ハ御座らね共

夫の代りにあなたこなた仕るニ依て すねはずいぶん達者タツシヤに御座

る すねおしを致ませう 其通云 シテ／弥々お、ちやくなやつて

ござる 男とすねおしをせふと云女が有物て御座るか 乍去致せ

ふト申せば成程相手に成ませう 其通云 二人出テ（八）／やいおのれ

ハふてきなやつじやなア おのれこそ大のうそつきよ トイヤイヤ

カラ下二居ル さあ／早ふせい カシコマツテゴザルト足ヲシヨスルトマケソウニナ

ルトマタクラヘ尾ヲサシコム ア、是々 トマヘヨヲサヘ立 目／なんとした

シテ／かつたぞ／笑なるまいそ／女／いや足おしに

まけハいたしませぬが あの大きい毛のはへたすねを いな所へ

ふみ込まするに依て 夫故の事で御座る 目／やい／なせに其

様なわるい事をするぞ シテ／さて／物をきやうさんに云やつ

て御座る 余りきつう勝たに依て足のきおいがすべり込た物て御

座りませう 目／是てハ済ぬ 最一勝負何ンそせい シテ／今度ハ

角力を取ませう 又其通云／扱々にくるやつて御座る ワらわを

女じやとおもふて様々の事をぬかしおりまする よう御座る 女

しやト云て角力を取りかぬる事で御座らぬ 其うへさいぜんから

きやつが力のほともしました 成程角力をとろうと仰られい

又其通云 シテ／扱々ふといやつて御座る よもや角力ハ請取まいと

存て御座れハとろふと申まする 目／中々 シテ／よふ御座る に

くさにくし打付てのけませう 目／夫ならハ身こしらへをして

是へ出よ シテ／心得ました 羽織ヌク／さあ／そちも是へ出よ

女／かしこまつて御座る タスキカケル シテ／やい女め 女／なん

しや シテ／おのれハ男ト角力を取ろうと云 すいさんなやつし

やな 女／おのれがやうなやつにまけうとおもふか 目／さあ

／それかしが行司をせふ シテ／一段とよふ御座ろふ 目／出て

二人／ヤア／ ト二ヘンシテ手ヲ引廻シ二三ベン廻シ こりや見たかトナゲテ

覚へたか／ ト枕元ニテスソラフルイテ女ハ入／ハア是でハ角力も取

られてこそ ト鼻ヲツマミクサイイニテ入ル

装束 シテ 狂言袴羽織ラクフ頭巾 箱似合敷くヲ連著ニテ出ス

女 箔 ヒナン 腰桶サケテ出ル（九） タスキ懐中スル

目代 長上下

からうせおつたそふな 女の身としてにくいやつしや なんとした物で有ふ イヤ致しやうが有 (朱) トライキタル物ヲヲロシ上ニ並 のふ  
 〳〵絹布か御用ならハ此方へ仰られ いやそれがしもちとまどろもふト存ル (朱) 同く願持ネル

女〳〵さて〳〵寝た事かな〳〵 是ハいかな事 のふ〳〵そこな人  
 〳〵 トラコス ムウそちハ誰しや 誰しやといふ事が有物か 人の棚へ来ていると云事ハ有物か シテ いや爰な女め ありやつて来てそれがしの棚へ来てかしましいやつしや 女〳〵エ、腹の立 おぬしこそありあかつて来てわらハが店ニいる のけいやい  
 〳〵 シテ おのれにくるやつ の すいさんをぬかすと引ずりのくるそ 女〳〵やい男 いかにななり共わがま、ハ成まいぞよ シテ  
 〳〵また其つれをぬかす あ、出あへ〳〵 ト引ズリニカ、リトクマツトアラニスル

目代〳〵やい〳〵是ハ先何事じや 是ハ何事ヲあらそふぞ 女〳〵おまへハとなたで御座り升 目〳〵所の目代しや 女〳〵先お礼ヲ申上まする 目〳〵礼ニハおよばぬか何事をあらそふぞ 女〳〵よふお聞キなされて下されませう 私シハ餅ヲ商売いたす女て御座るが 此所御富貴に付て初て市をお立てなさるゝ 誰にハよるまい一の棚に付た者をは市司を下さるゝとの御高札か立たと申に依て 夜の内から参つて一の店についてござれハ どこからやらあそこな男めが参つて 私シのそばに依てのけと申せば のくまいと申のミならず わらわを女しやト思ふてあなとりまして 私シを引のけふと致シ升る 急度仰付られて下されませう 目〳〵是

ハ最モじや やい〳〵汝ハ先何者しや

シテ〳〵ハ (5) 私シハ此当りの絹布を商売致ス者て御座る おまへハとなたで御座り升 目〳〵所の目代しや シテ 先御礼ヲ申上ルル 目代〳〵礼ニハおよばぬかおそう来てあれにのけとハ何ンとした事ヲ云 シテ 扱々あ女めハこんじやうのおそろしいやつで御座る 此所 (3) はんしやうに付まして 初て市ヲ御立なさるゝ一の棚ヲかさつた者にハ市司を下されうとの御高札が立ましたニ依て 早々ヨリ参り一の棚ヲかさりましたれハ あれにいおる女めがとつとありあかつて参りまして 早に参た私シニのけと申升るか 夫故の事て御座り升 目〳〵すれハそちが早ふ来たがじやうか

シテ〳〵何かさて早ふ参りました 女〳〵エ、わらわを女しやとおもふて其様ナうそヲ申まする ワらわか男が参つたらハ得申ますまい 先其おそい早イハとも有レ 此私シの商売致しまする餅と申物ハ日出度物て 年の初メヨリ年中の四季折々おいわひ物にハ上々様ハ申二及ばす 下々迄此かちんでこそいわい升ル 一つの習二小間物やけんふの切々て日出度いわるの有た事が御座らぬ加様の日出度新市にハ私シハ出いでかなわぬ者て御座る あいつハつと市末へ仰付て下されませう 目〳〵今のを聞たか シテ 是て承りました 尤モあれが申通に餅は上々から下々迄いわる事にはいる物て御座る 乍去 又此絹布と申物ハ上々ハ申二不及 下々迄も四季折々の着 (6) がへをなされて扱其上にこそ餅もおいわるもござらうずれ 冬などはだをあらハに見せて御座つてハお正月もお節句も もちもかちんも入ますまいと存升ル

・原文には句読点はないが、詞章の区切り等に一字分の空白を置いた。

・本文中に抹消・訂正のある場合、

ー 原文が抹消・訂正されている場合は抹消線を施し訂正後の本文を「」に入れて示した。ただし、単純な書き損じの場合は抹消・訂正は無視した。

ー 抹消せずに別の本文が併記される場合は傍線を付して、訂正後の本文を「」に入れて示した。

・本文中に記される型付の多くは二行分かち書きだが、本稿では文字を小さくして一行で記した。

### 【No.57―7 連著】

米 田 真 理  
10行×12行、罫線無。本文中、役名、振り仮名、型付（原資料は二行分かち書き）、濁点は朱書。節付は墨書。合点は朱書の場合と墨書の場合がある。

牧野本の〈連著〉は『波形本』とほぼ同文を記しているが、『雲形本』系とは結末部分が大きく異なる。餅売りの女と絹布売りの男が市場の場所取りで争い相撲で決着を付ける点は同じだが、『波形本』や牧野本における勝った女が男の顔の上で着物の裾を振るい臭気を見舞うという演出は、『雲形本』系にはない。この演出については江戸後期の三宅派の台本である『狂言集成』によれば、『昔の』演出であるが「当代にても用る」という。『波形本』や牧野本の演出は、この「当代」の例に該当すると考えられる。以

上の考察は拙稿「和泉流狂言〈連著〉（れんじゃく）の今昔」（『東海能楽研究会年報』第20号、二〇二三年三月）にまとめた。

### 連著

アト女／是ハ此当りに餅ヲ商売する者て御座る 此所る富貴ニ付テ始テ市をお立テなさる、誰なり共一の店に付た者ニハ市司を下され候との御高札か立たと申ス 夜深ニハ御座れ共 急いて参り一の店につかふとおもひまする 誠ニ目出度事て御座る 加様に新市の出来ると申ハ所はんじやうの印て御座る わらハも一の店に付たらハ ちと商売の望もござれば おもひのま、にぬしもあきないをいたされうと存て 此やうな嬉しい事ハない いや何角ト云内ニ爰が市場さうな のふくうれしやまた人も見へぬ 一の店ヲかさらふとおもひまする のふく餅がまいり度はこなたへ御され ヤ また夜深ナ程ニちとまどろもふとおもひまする （米）ト鍋八撥ノヨウニ扇ヲ持ネムル

シテ／是ハ此当りに絹布を商売する者て御座る 当所富貴に付て初テ市ヲ御立なさる、何者にハよるまい一の店に付た者には市司を下さるゝとのお事て御座る 某も参り一ノ店をかさらふと存ル （米）シカク 誠に天下納り目出度砌りて御座るニ依て新市迄お立なさる、加様の折から生れおふたこそ幸なれ 一の棚をかさつても御座らハ商売 ヲ広めうと存て此やうな嬉しい事ハ御座らぬ ヤ 何角ト云内にはしや は、先ハ広イ市場しや 末はんじやうと見へて末広ナリの市場じや あの女めハおと、いあたり

豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵 牧野新作（眞三九・方叔）関係伝書  
翻刻と解題 [三]

*Kyogen Drama Scripts Transcribed by Shinsaku Makino and Possessed by Yasumi Kumano Jinja in Toyohashi, with Reprint and Bibliographical Introduction*

米田真理（朝日大学 日本語研究室）

YONEDA Mari

*Department of Japanese, Asahi University*

本紀要第44号（二〇一九年度）・第46号（二〇二一年度）に引き続き、表題の狂言台本（以下「牧野本」と称す）の翻刻を掲載する。今回は「No.57-7 連著」「No.57-8 牛馬」「No.57-9 懐中髯」「No.57-10 八幡前」「No.57-11 六地藏」「No.57-12 蚊相撲」の六番を取り上げる。いずれの曲についても、牧野本のおおよその性格を示すため、翻刻の前に書誌や他本との比較に関するコメントを付した。

なお、曲の番号について、第46号では「No.57-2 千切木」に混入している（釣狐）の一部と小歌に独立した通番を付さなかったため、第44号掲載のものとはずれが生じていたが、本稿では第44号

記載の番号に再修正した。

〔謝辞〕本稿を成すにあたり、魚町能楽保存会をはじめ、東海能楽研究会のみなさまからご協力を賜りました。なお、本研究はJSPS 科研費 JP17K02431 の助成を受けたものです。記して深謝申し上げます。

〔凡例〕

- ・漢字の字体を通行のものに改めた。
- ・原文の改行は無視したが、場面の区切り等、意味のある改行については再現した。